The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『和漢朗詠集』の排列基盤
Author(s)	百井, 花
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2022, 5, p. 15-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87122
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『和漢朗詠集』の排列基盤

日本文学専修　学部３年
百井　花

はじめに

『和漢朗詠集』は平安時代中期に成立した藤原公任撰の詩歌集である。『和漢朗詠集』の研究は詩句や和歌の解釈、出典、他作品への影響などにおいて豊富であるが、排列をはじめとする編纂意識に関する研究はほとんど行われていない。数少ない編纂意識の研究も、一部の項目のみが論じられている。排列の性質上、一部の項目のみから検討した編纂意識が『和漢朗詠集』全体に通底するとは言い切れず、より全体的な考察を要すると思われる。そこで本研究では、最初に全項目共通の意識を捉えたうえで各項目の編纂意識を詳らかにしたい。

全項目共通の意識とは何か。『和漢朗詠集』の排列は「中国漢詩句（散文→韻文）・日本漢詩句（散文→韻文）・和歌」と展開することは既に指摘されている。また、先行研究ではっきりとは指摘されていないものの、各項目のなかは作者の年代順によって整列されている。これら二つは全項目共通の規則だと思われる。

これら二つの規則の例外にこそ、撰者の強いこだわり延いては編纂意識を読み取れるのではないか。本研究ではまず全項目から二つの規則の例外を抽出したうえで分類し、どのような意図をもって規則の例外となったかを考察することで撰者の編纂意識を明らかにしたい。本研究の目的は『和漢朗詠集』における撰者の編纂意識を明らかにすることであり、規則の例外以外にも端緒となるものは広く言及する。

使用するテキストは『御物倭漢朗詠集』を底本とする『現代語訳付き和漢朗詠集』（三木雅博、平成二五年、角川ソフィア文庫）である。

例外の抽出・分類

『和漢朗詠集』全項目の作者とその年代を表にまとめ[1]、その例外[2]を抽出した。各項目から「中国賦」「中国詩」「日本賦」「日本詩」「和歌」それぞれを１単位として例外を数えると全体で 49 単位[3]になった。これらの例外を分類すると、以下の通りである。

A.「中国漢詩句→日本漢詩句→和歌」となっていないもの（3 単位）

3	元方	？～953
325	都在中	未詳（平安中期）
386	未詳	未詳

B. 作者の年代順となっていないもの（46 単位）

a. 村上天皇

89	村上御製	926～967
90	江相公	886～957
91	菅三品	899～981
92	菅三品	899～891
378	村上御製	926～967
379	菅	845～903
380	尊敬	？～953,4
600	村上御製	926～967
601	空也上人	903～972
602	伝教大師	767～822
603	左相府	966～1027

b. 元白

9	元	779～831
10	白	772～846
65	元	779～831
66	白	772～846
67	白	772～846
435	白	772～846
436	元	779～831
540	元	779～831
541	白	772～846
542	温庭筠	812～870
706	元	779～831
707	白	772～846
708	白	772～846

c. 勧学会

590	保胤	？～1002
591	後中書王	964～1009
592	匡衡	952～1012
593	保胤	？～1002
594	斉名	957～999
595	野	802～852
596	斉名	957～999
597	以言	955～1010
598	保胤	？～1002
599	同前	？～1002

d. その他

例外の考察

A.「中国漢詩句→日本漢詩句→和歌」となっていないもの

いずれも項目内に二つのテーマが詠まれている。「雁付帰雁」「氷付春氷」のようにテーマが複数であることが明示されているものだけでなく、「立春」のように黙示される場合もある。規則を破って唐突に挿入されたようにみえる詩歌はテーマの切り替えに面してお

り、実際はテーマごとに本規則は順守されている。全体を通して確実に守られる本規則は『和漢朗詠集』の編纂において非常に重要であり、強く意識されていたことがわかる。

B. 作者の年代順となっていないもの

a. 村上天皇

村上御製は全部で四作収められている。前後が作者未詳で分析できない一例を除いては、いずれも日本漢詩句あるいは和歌の冒頭に排されている。巻頭歌を意識した排列だと思われる。『新古今和歌集』頃になると、天皇御製は意識的に巻頭・巻軸に置かれることがある。巻頭・巻軸歌は特別な配慮がなされる場所として歌集編纂の重要な位置を占めるようになったのである。この傾向は『和漢朗詠集』成立当時にはみられない。

撰者が村上御製を冒頭に排したのは、聖代思想に起因すると思われる。一条朝の文人・小野宮家という視座から聖代思想を支持したのである。

村上天皇は醍醐天皇と並んで聖帝とされ、その治世は文運隆昌・人事公正の理想的な「聖代」であったと評される。一条朝において、村上天皇を聖帝とみなす姿勢は強い不遇意識を持つ文人貴族層をはじめ貴族層全体に行き渡ったとされる。

撰者の小野宮家はもともと藤原北家嫡流であったが、傍流の九条家台頭により政治の主導権を奪われたとされる。人事面への不満も募っていたとみえる。撰者もまた、そのように不遇意識を抱く文人中級貴族の一員なのである。

小野宮家が第一流として活躍していた時代が村上朝である。関白の忠平、右大臣の師輔、左大臣の実頼など、小野宮家が村上朝において重用されていたことがうかがえる。撰者にとって、小野宮家の栄光の時代として村上朝が鎮座するのである。また、小野宮家長者である実資も聖代思想を抱くと先行研究[4]で指摘されている。それによると、「実資にあっては、とくに道長に対する憤懣が過去の延喜天暦を美化せしめているように考えられるのである。」とある。九条家たる道長の専横への反感が、聖代思想を加速させるのである。九条家に第一流を追われた小野宮家の一員として、聖代思想を抱いたと考えられる。

b. 元白

白の方が早い生まれであるが、一例を除いて全て元が先行している。白と元が「元白」という呼称で定着しているため、その順番で排列されたと推察できる。「元白」という呼称は漢籍と国書両方にみえる。撰者と交流の深い文人である具平親王にも用例がある。また、白と元二人の詩をまとめた『元白詩筆』がある。839 年に唐人の貨物から発見され、天皇に献上された。これは白居易詩文の最も早い伝来の記録とされる。最も早い時点で「元白」と称されていたのである。

c. 勧学会

勧学会とは村上天皇の 964 年に始まり、紀伝道学生・文人が比叡山天台の僧侶とともに

行った法会である。中心的存在は慶滋保胤である。紀伝道学生・文人らは、浄土教と白居易を主として、文学と仏道の調和を目指したとされる。

「仏事」項目は実に、勧学会にまつわる詩歌が多い。588 番詩と 599 番詩は『三宝絵詞』の勧学会にまつわる記述にみえる。特に、588 番詩は先行研究[5]では勧学会の志向にかかわるとされる。

また、日本人漢詩十作のうち、作者は 591 番詩の具平親王と 595 番詩の小野篁を除いて全員が勧学会結衆であることがわかる。具平親王は勧学会の中心的存在である保胤に幼少から師事しており、結衆の大江匡衡との交流も知られる。勧学会とは近い存在である。

十作のうち、約半数である四作は勧学会にまつわる詩だと思われる。勧学会で詠まれたと明らかにわかるものは 593 番詩と 594 番詩である。加えて、598 番詩と 599 番詩も勧学会の作だと推定できる。

また、和歌の最後である 603 番歌が道長作であることも注目すべきである。勧学会は一時廃絶したが、のちに復興される。勧学会の復興に一役買ったのが、道長とされる。撰者は道長を第二期勧学会の援助者として捉え、巻軸に据えたのではないだろうか。撰者の勧学会への関心は第一期だけでなく、第二期にまで及ぶのである。

おわりに

本研究では『和漢朗詠集』における撰者の編纂意識を明らかにせんとした。特に、全項目から二つの規則の例外を抽出したうえで分類し、どのような意図をもって規則の例外となったかを考察した。

初めに、「中国漢詩句→日本漢詩句→和歌」となっていない例を確認すると、いずれも一つの項目内に二つのテーマが詠まれており、テーマごとでは規則が順守されていた。そのため、この規則に反する例はなかったといえる。なお、一つの項目内にテーマが複数あることは明示されているものだけでなく、黙示される場合もあることがわかった。

次に、作者の年代順になっていないものを村上天皇、元白、勧学会、その他へと分類した。村上天皇グループでは、撰者が村上天皇を項目の最初に排列すること、これは一条朝に盛んとなった聖代思想に起因することが明らかとなった。また、元白グループでは「元白」呼称の定着などにより、撰者自身にとって自然な排列が、年代順の規則に優越する場合があることがわかった。勧学会グループでは、「仏事」項目では勧学会にまつわる詩歌を多数採用しており、勧学会を意識した構成であることが明かされた。

---

1 作者名と生没年については『平安時代史事典』、『和歌文学大辞典』、『現代語訳付き和漢朗詠集』を参考とした。

2 作者名や生没年が未詳で、年代順になっているか正しく判断できないものについては例外の抽出から除いた。

3 『和漢朗詠集』全体を単位分けすると 419 単位である。例外の割合は約 11%である。

4 『延喜天暦時代の研究』（林陸朗「所謂「延喜天歴聖代説」の成立」、昭和四四年、吉川弘文館）

5 「勧学会－狂言綺語観の展開⑴－」（中川徳之助、昭和三〇年、国文学攷 14 号）